

図書館将来計画懇話会 報告書

〈公開版〉

2012年2月

懇話会メンバー（五十音順）

伊藤昌亮（メディアプロデュース学部）

伊藤真理（人間情報学部）

大塚英揮（ビジネス学部）※報告書とりまとめ

小川一美（心理学部）

川嶋英嗣（健康医療科学部）

永井聖剛（メディアプロデュース学部）

村主朋英（人間情報学部）※座長

山田 稔（愛知淑徳大学図書館）

書記 武藤まり子（愛知淑徳大学図書館）

1. 本学図書館の現状 ～「クリエイティブな学びの場」ではなく「本の置き場」と化した図書館

図書館は、単なる「本の置き場」としてではなく、情報を探し、情報と出会い、他者とのコラボレーションにより新たな情報を生み出す「クリエイティブな学びの場」として機能すべき機関である。「クリエイティブな学び」を大学において実践するためには、図書館が (1)学習者が情報を「探す」作業を支援する機能、(2)学習者が新たな情報を生み出すために行う「コラボレーション」を促進する機能、を備える必要があるだろう。

しかし残念ながら、愛知淑徳大学図書館は、クリエイティブな学びを実現するために必要となる、これら 2 つの機能を不十分にしか有していない。以下この問題について、情報を探し、情報と出会う場としての図書館、ならびに学習者の「コラボレーション」の場としての図書館、という 2 つの側面に分けて詳しく見ていくことにする。

1-1 情報を探し、情報と出会う場としての本学図書館の現状

情報を「探す」という場合、明確な目的をもって探すケース、目的をもたずにぶらっと図書館の中を歩きながら探していくケースが考えられるが、この両方のケースに応えられる十分なキャパシティが愛知淑徳大学図書館には備わっていない。

まず設備面では、閲覧スペースの面積が長久手 871 m²、星ヶ丘 224 m²となっており、これらを合計しても、全私立大学平均の 1,648 m²には及ばない狭さである。書架の収容力も長久手と星ヶ丘の両方を合計すれば、全私立大学平均を上回る数値になるものの、長久手と星ヶ丘の収容可能冊数には大きな差がなく（長久手 290,111 冊、星ヶ丘 226,278 冊）より多くの学生を抱える長久手における収容力の乏しさが、問題として顕在化している。

具体的には長久手は書架稼働率が 90%を超えているなかで、学部再編による星ヶ丘からの大量移動を 2012 年度まで実行中である。これまでに、業務用書架の利用者用への転用、全紀要の雑誌バックナンバー室・星ヶ丘への分散配置、洋図書の三分の一を書庫 4 層から 1 層へ移動など、数度の大規模な移動を行った。このほか小規模な移動は日常的で、書架の運用管理にかかる手間も大きい。

この結果、書架スペースは狭隘化が進行し、「ぶらっと歩きながら本と出会う」ことは望み薄な状況となっている。

一方、目的を持って情報を探す場合に有効となるのがデータベース、電子ジャーナル、ならびに検索、閲覧ツールとなる情報端末である。愛知淑徳大学図書館に備わっている

電子ジャーナルの総数は国内 49 種、国外 2,044 種、合計 2,093 種と全国私立大学平均の 2,152 種に匹敵する水準に達しているが、学生が主として用いる国内のジャーナルが全私立大学平均の 229 種よりも格段に少なくなっている。また、情報端末スペースも長久手 64 m²、星ヶ丘にいたっては 27 m²しかなく、全私立大学平均の 96 m²には遠く及ばない状況になっている。ソフトの面でも情報処理技術者など情報に関するスキルを有する職員はゼロとなっており、データベースや電子ジャーナルの有効活用を促す上でのネックとなっている。

すなわち、「情報を探す場」として機能する閲覧、情報端末スペースが乏しいのに加え、閲覧、情報端末スペースと完全に切り離された書庫の中に本がただ置かれている、すなわち「情報を探し、情報と出会う場」、というよりは単なる「本の置き場」と化しているのが愛知淑徳大学図書館の実態なのである。

さらに「本の置き場」として考えても、特に長久手においては、十分なキャパシティを兼ね備えていない。学外書庫の拡大で臨時に乗り切る対応も物理的レベルでは有効であろうが、学外書庫を拡大すれば、それは「情報を探し、情報と出会う場」としての図書館の機能をより損ねることにつながるであろう。このトレードオフにどう向き合うか、この点が緊急に解決を要する課題となっているのである。

1-2 学習者の「コラボレーション」を支援する場としての本学図書館の現状

かつて、大学では、学生がただ黙って聞くだけの講義が一般的で、知識を深めたい人は、個人レベルで本を借り、読み進めればよい。そんな学生を「自立した個」として扱う教育スタイルが主流であった。そのような成熟した大学生を対象顧客とするのであれば、本学のような「本の置き場」としての図書館も存在意義を持ち続けることができるだろう。

しかし現在では、自ら主体的に学ぶ習慣を高校時代までに身に付けている大学生は少数派となっしまい、「自立した個」として扱う教育では、教育効果をほとんど期待することができない、という状態にある。

そこで大学教育でも、講義で教員の側が問題を与え、その問題に対して学習者は「個」でぶつかるのではなく、「個」と「個」のコラボレーションによって解決に当たるようなスタイルが積極的に用いられるようになってきた。この大学における「学び」のスタイルの変化、すなわち「自立した個が個人で主体的に知識を深める」スタイルから、「他者とのコラボレーションによって、問題を主体的に解決していく」スタイルへの変化に、

図書館の側も対応していかなければならないのである。

本学図書館も、大学における学習スタイルの変化に全く対応してこなかったわけではない。ゼミ単位で、研究のために必要となる文献の検索、活用の仕方をレクチャーする文献利用講習会や図書館の利用法をレクチャーする図書館ガイダンスを積極的に実施、学習者の「コラボレーション」を間接的に支援してきた。しかし、それらはマンパワーの不足から、全てスポット的な支援にとどまっているのが実情である。

またハードの面から見ても、「学びのコラボレーション」を行うための場として使えるスペースが（図書館内だけでなく本学全体で見ても）絶対的に不足している。「他者とのコラボレーションによって問題を主体的に解決する」学習を促し、卒業生の質を高めるために、これらの問題を解決することが今本学には求められているのである。

1-3 本の置き場としての本学図書館の現状 ～蔵書数と貸出数の不均衡が顕在化

以上のことから、本学の図書館は「クリエイティブな学びの場」というよりも、単なる「本の置き場」と化していることが明らかとなったのだが、それでは本学の図書館が果たして「本の置き場」として求められる必要最低限の機能を有しているのか、という点について今度は精査していくことにしたい。

本学図書館の学生数は 8,458 名。それに対し、蔵書数は 364,849 冊（2011 年 3 月 31 日現在）。1 人あたり蔵書数は 43.1 冊。朝日新聞社『大学ランキング 2012』に掲載されている 1 人あたり蔵書数で比較すると、本学の 1 人あたり蔵書数は、金城学院の 95.5 冊、椙山の 73.8 冊よりも格段に少なく、愛知県でワーストの部類に入る中部大学の 47.5 冊にすら及ばない状況である。ちなみに全国大学の平均 1 人あたり蔵書数は 96.9 冊であり、本学の倍になっている。

確かに、学生側に本に対するニーズが他大学に比べて著しく乏しいのであれば、蔵書数の少なさは、需給にかなっており合理的である、という判断になるが、実態は逆である。本学図書館の 1 人あたり年間貸出数（朝日新聞社『大学ランキング 2012』）は、8.4 冊で、全国平均の 7.3 冊を上回る水準に達している。1 人あたり蔵書数が同じ水準にある中部大学の 1 人あたり年間貸し出し数が 3.9 冊でしかないことを考えると、需給のギャップは大きいと見ることができる。ただしこの 1 人あたり年間貸出数には、学部間で格差が見られる。図 1「学生の貸出からの分析」によれば、文学部、表現文化、視覚科学が 10 冊を超える水準にあるのに対し、人間情報、メディアプロ、スポ健、星ヶ丘キャンパスの交流文化、ビジネスは 4 冊を切る水準（冊数の一番低いビジネスは平均 2.1 冊程度し

か 1 人が一年に借りていない) にあり、需給のアンバランスは現状では長久手のほうがより大きくなっていることを 2010 年度の学科別に見た学生向け貸出数から読み取ることができる。

すなわち、「本の置き場」としての機能も本学図書館は十分に発揮していないというのが現状なのである。

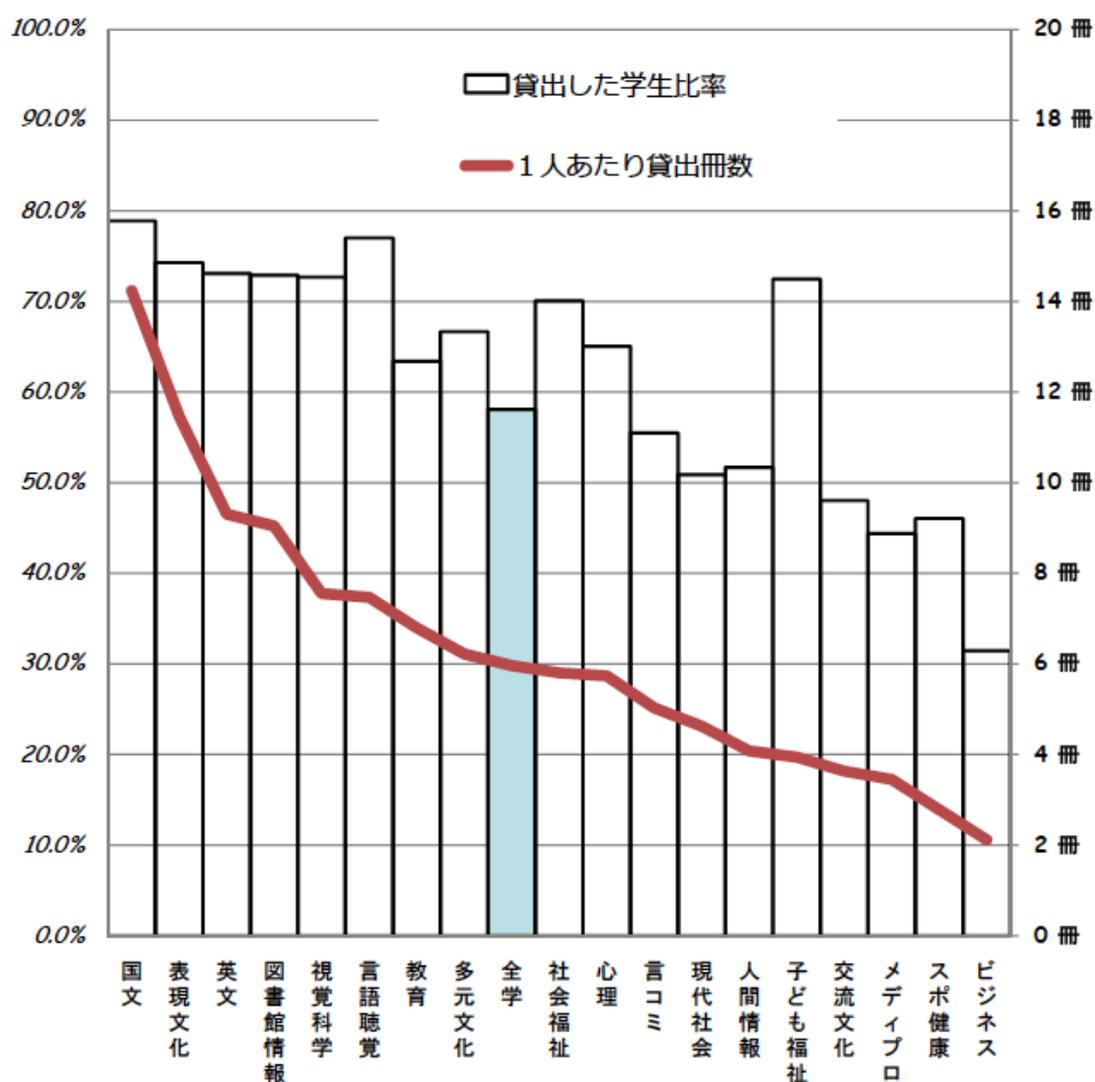


図 1 学生の貸出からの分析 (2010 年度)

2. 本学図書館改革の方向性

ここでは、愛知淑徳大学図書館を単なる「本の置き場」から、「クリエイティブな学びの場」へ進化させていくために、どのような図書館改革を行っていけばよいのか、この点について検討していく。

2-1 リメディアル教育の軸として図書館を位置づける

図書館改革の方向性を示す上で、まず着目しなくてはならないのは、主たる利用者である学生のニーズである。学生の貸出データからの分析では、本学の図書利用頻度には大きなばらつきが見られ、8割近い学生が図書館の貸し出しサービスを利用し、10冊以上年に借りている学部もあれば、3人に1人程度の学生しか貸し出しサービスを利用せず、年に2冊しか本を借りることがない学部もあることが判明している。本の利用が減っているのみならず、どこでも可能なウェブ検索に過度に依存し、ウェブで見つかった無料の情報をそのまま信頼して使用する学生が増えてきているのが実情である。

このような状況は本学固有のものではない。

表1は、辻洋一郎「中堅文科系大学におけるリメディアル科目はどうあるべきか」『桃山学院大学総合研究所紀要』35巻3号 p.35. から引用したものである。この大学で、実際に大学入学時に調査を行った結果、レポートの書き方、メモの取り方については、8割以上が丁寧に教わった経験がなく、勉強の仕方についても4割の学生が教わったことがないという。勉強をどのようにしたらよいかわからない、勉強のために必要となる資料をどこからどのように集めたらよいかわからない、このような学生が占める割合は本学でも増えてきていると思われる。主たる利用者である学生のリテラシーレベルが低い水準にある状態で、図書館のみ高機能化しても、大きな学習効果を期待することはできないだろう。

	①教わっており覚えている	②教わったが忘れた	③教わっていない	④自分で覚えた	合計	③+④
1) ノートの取り方	10	8	11	4	32	14 (44%)
2) メモの取り方	5	1	21	5	32	26 (81%)
3) レポートの書き方	2	0	29	1	32	30 (94%)
4) 小論文の書き方	8	13	10	1	32	11 (35%)
5) 勉強の仕方	15	4	6	7	32	13 (41%)

表1 リメディアル科目受講生の高校までのリテラシー習得状況

そこで、本懇話会では、リメディアル教育の軸として図書館を位置づけることで、図書館に新たな付加機能を追加していく方向性をまずは目指すべきではないか、との結論に至った。そのためには、図書館に「レポートの書き方、本の調べ方、読み方」など、基本的な学習技術を教えることのできるスタッフを配備する必要がある。院生チューターや図書館のスタッフ（臨時で学部教員も？）をその任につけることが望ましいであろう。しかしここで大きな問題となるのは、図書館においてマンパワーが恒常的に不足している、という問題である。正規職員が各館に1名ずつで、図書館の専門職としてもスタッフを雇用していない状況では、時間的余裕がないうえに、中・長期的な展望をもつことは難しい。そのため、レポートをどう書くか、本をどう読むか、といった基本レベルのスキルを学生に教育することに時間を割くことは不可能である。リメディアルと図書館との接点をつなぐ職員（助教）の雇用、すなわち物質としての本を扱うのではない、情報を取り扱う際のガイド役となりうる専門職としての専任職員の直接雇用、生え抜きスタッフの養成、といった対策が合わせて必要となるであろう。

また、リメディアル教育の軸として図書館を位置づける上では、日本語教育部門との連携、それに加えて学部で行われている導入教育科目（新入生ゼミナール等）との連携をさらに深めていくことが必要となる。確かに導入教育では図書館が実施するオリエンテーションを講義の中に取り入れている例が散見され、一見すると、図書館と導入教育との連携は進みつつあるように見える。しかし、検索といえばウェブ検索、読み物といえば、フリーペーパーかライトノベルという「気軽に肩が凝らずに触れられるメディア」にしか関心がなく、専門書なるものをどのように扱えばいいのかもわからない状態で、図書館のオリエンテーションを受けさせても、そこで見聞きした内容が「使える知識」として定着することは難しいと思われる。図書館におけるオリエンテーションは大変に工夫されており、わかりやすく役立つ内容であることは事実である。しかし、「探す技術」というのは、「体験による学習」でしか身に付かない暗黙知的なものであるから、学生の能動的な図書館に対する働きかけとそれによって主体的に「体験知」を獲得する経験が、「探す技術」習得において絶対的に不可欠なのである。導入教育の中で、図書館で「情報を探す技術」を主体的に獲得する経験を積めるような「仕掛け」を設けること。それを学部の側に強く要請していくことが、リメディアル教育の中で図書館を機能させるために必要となるであろう（参考：千葉大の事例）。（高大連携のほうで、新入生に読ませるブックリストの作成など、図書館との連携につながる仕掛け作りに取り組んでいるようなので、こちらとの連携も当然視野に入れるべきであろう。）

また、導入教育で図書館を使い情報を集め、レポートにまとめるような教育を実施し

ても、学生にそれが「勉強」でしかなく、「将来に役立つ体験である」という認識がほとんどないため、効果が現れにくい、という指摘もある。それゆえ、リメディアルのみならず、キャリア教育のカリキュラムにおいても、図書館を積極的に使う「仕掛け」を設けていただくよう働きかける必要があるだろう。

2-2 学部専門教育との連携を強化する

図書館をより効果的に機能させるためには、学部専門教育との連携が不可欠である。ここではこの図書館と学部専門教育との連携について、演習系科目と講義系科目に分けて考えていくことにする。

まずゼミナールなどの演習系科目との連携については、設備面で大きな問題を1つあげることができる。それは、本学のキャンパスには楽しいダベリングの場所は多々用意されているが、真面目にグループで研究、ディスカッションするための場所は決定的に不足している、という点である。

ダベリングの場所と異なり、グループで研究、ディスカッションするための場所、にはすぐそばに「情報を探す場」が存在していることが不可欠である。しかし、情報教育センターは私語禁止でグループでのディスカッションは不可能、さらに図書館にもグループ研究のための場所は長久手に3ヶ所（定員は各12人、8人、16人）、星ヶ丘に2ヶ所（定員12人）しかない、というのが実情である。横浜国立大学図書館では、図書館のすぐそばに、無線LANが引かれたラウンジが設置され、図書館の資源を使いながら学生がディスカッションする姿が見られた。まじめなグループワークは社会人として必要な「チームワーク」を学ぶことにもつながる。グループ学習を支援する設備の強化も急務であろう。

次に、講義系科目との連携については、人間情報学部のメディアリテラシー、情報検索演習など、各学部の一部の科目で図書館に配備された資源を活用する授業を展開している例が散見される。このような試みをより多くの専門科目に広げていくことが必要であろう。

講義系科目の中で図書館を主体的に使う仕掛けを設けるためには、次の2つのことがさらに必要となるように思われる。

- (1) まず、教員の側が図書館に精通することが求められよう。どんな資料がどこにどの程度配備されているのか、どんなジャーナルやデータベースが入っているのか、パス

ファインダー、文献利用講習会、Tosho-Ring、その他レファレンスで提供しているサービスについて主体的に知ろうとする意識を各教員が持つよう努力すべきである。

- (2) レポートなどでテーマを提示し、そのテーマに沿った資料をただ探してこい、という指示の仕方ではなく、より具体的に資料の探し方、読み方、図書館の使い方、に関するアドバイスを行う必要がある。また将来的に2-1で提言した図書館のリメディアル教育対応機能が整備された暁には、各講義科目でどのような資料を用いた課題を出しているのか、図書館側と共有する（アカデミックポータルなどで図書館のリメディアル担当職員がいつでも参照できる）仕組みを整備することも有効であると思われる。

また、学部との連携は、蔵書の選定においても重要であると思われる。書庫の狭隘化が進み、効率良くスペースを使っていくためには、実際に教員の側が教育において使用する資料の割合を高めることが有効となる。講義やゼミで使用する資料に関する情報を図書館と教員間で今以上に共有することができれば、蔵書におけるより効率のよい品揃えが実現でき、それが結果としてスペース効率を高めるものと思われる。

2-3 クリエイティブな学びの場として必要な機能の充実

図書館を単なる「本の置き場」ではなく、「クリエイティブな学びの場」として認知してもらおうこと。そのためには、まず設備面での手当てが必要であるように思われる。

まず「クリエイティブな学び」への出発点となる「情報を探し、情報と出会う」体験をより効果的に学生にしてもらうために、最大のネックとなっているのが、資源の分散である。図書館以外に、「情報を探し、情報と出会う」体験ができる場としては、情報教育センターをあげることができるが、情報教育センターと図書館は位置的にも離れ、内部スタッフの連携も不十分である。将来図書館の資源の電子化が一層進んでいくことを考えると、情報教育センターと図書館が完全に分離している現状を早急に改善する必要があると思われる。

「クリエイティブな学び」の第2ステップである「コラボレーションをベースとした問題解決型学習」を支援する上で有効となる改革のイメージとしては、「ラーニングコモンズ」的なものを想定するべきであろう。「ラーニングコモンズ」とは、「学習するために皆が集まる共有スペース」のことであり、様々な国公立、私立大学図書館で、このような考え方を取り入れた図書館の改革が進められている。実際に見学した横浜国立大学の図書館では、PCに相当する端末スペースが図書館内に配置され、図書館の本をわざわざ

ざ外へ借り出さずに、その場で調べてすぐにレポートに反映できるレイアウトが採用されていた。グループ学習席も PC、情報コンセント、モニタなどが設けられていて、「情報を探し、情報と出会い」ながら、議論できる仕掛けが整備されており、非常に学生にとって「使い勝手の良い」環境が提供されていた。これに対し、本学図書館のグループ席では、LAN も整備されておらず、利用申請の更新が頻繁に必要であったりして、使い勝手が悪い。「主体的に学ぶ」という行為に対して関与の低い学生の目前に、使い勝手の悪い施設を提示しても、学生の学習意欲を高めることは困難であると思われる。

スタッフの増員、育成は、「ラーニングコモンズ」的なものを今の図書館に作り出していく中でも必須であろう。学習の仕方がわかっていない学生に「場」だけを与えれば、その「場」は食堂と何ら変わらない「ダベリングの場」と化してしまうことは明白だからである。「学習者のコラボレーション」を支援するためには、その「場」を管理するスタッフがどうしても必要なのである。「コラボレーション」を支援する機能を担うスタッフには、主題知識を豊富に持ち、学習を促すファシリテーターとしての機能も求められる。

例えば、法政大学では、9 人の専門職員が、多摩キャンパスにある経済学部、社会学部、現代福祉学部の全てのゼミを分担し、ゼミに合わせた選書、ガイダンスを行うとともに、ゼミ生が研究テーマを書いたエントリーシートを提出すれば、研究活動の進展にあわせた継続的な支援（選書、ガイダンス）を受けられるようなシステムが構築されている¹。また千葉大学では、パスファインダーを接点とする教育と研究のリエゾン（連携）を模索²しており、優れたパスファインダーを資源として有する本学図書館にとって参考にすべき事例であるということが出来る。文献利用講習会やガイダンスのようなスポット的な支援にとどまらず、利用者と図書館員の連携（リエゾン）をベースにした継続的かつタイムリーなサービス提供を行う「リエゾンライブラリアン」の育成が急務となっているのである。

ちなみに人間情報学部伊藤真理ゼミが学生の図書館サービスの認知度を 2011 年 6 月に調査した結果、レファレンスサービスを利用したことが「ある」人は人間情報学部で 16%にとどまっており、46%の学生は「知らない」と答えている。また、知っているデータベース名を回答させたところ、青空文庫 123 名、Google Books 57 名、中日・東京新聞データベース 58 名と、研究、調査に有益な多数のデータベースについてその存在すら

¹金山、武内（2007）「日本におけるリエゾンライブラリアン：千葉大学附属図書館の挑戦」『専門図書館』No.222, p.17.

²金山、武内（2007）pp.17-18.

知らない（ちなみに 93 名が何も知らないと答えている）状態であった。この調査結果からも、学生はデータベース、電子ジャーナル、レファレンスサービスに対して乏しい知識しか有していないことがわかる。このような知識の乏しい学生に、「情報を探し、情報と出会う」体験をさせるためには、設備面だけでなく人員面、すなわち「情報を探し、情報と出会う」体験のガイド役を努められる支援スタッフの増員が絶対的に必要であり、この点の手当てを強くお願いしたいところである。

2-4 図書館改革への方向性:オーバービュー

以上 3 点からなる図書館改革への方向性で述べてきた内容を図でおおまかにまとめたものが下の図 2 である。

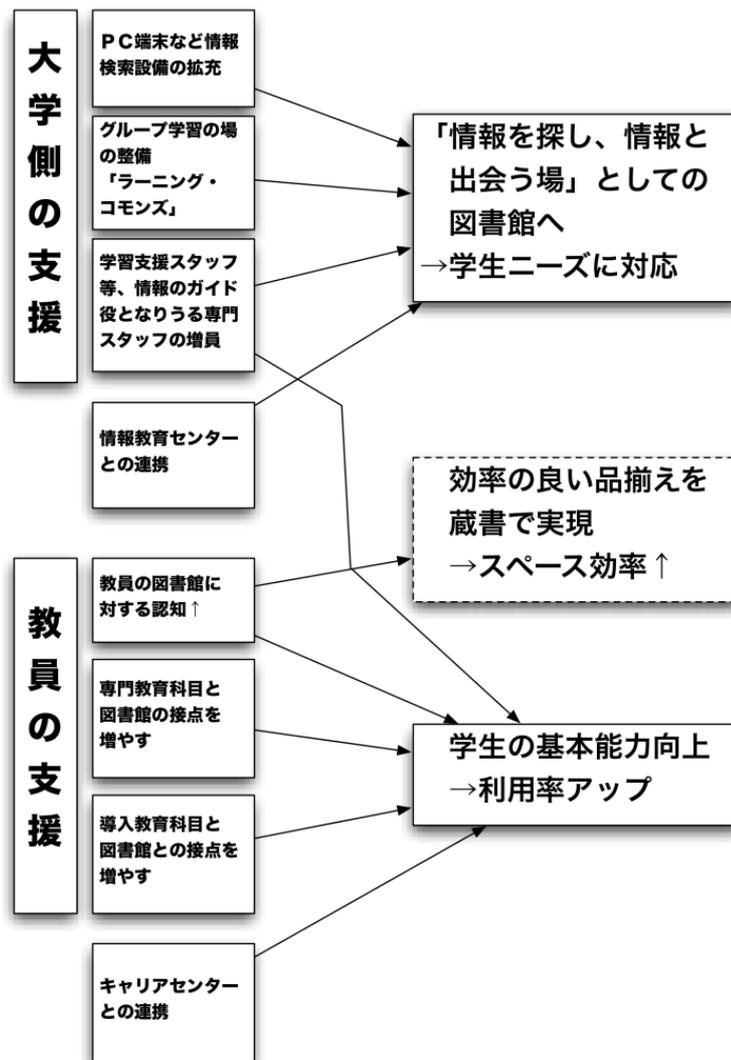


図 2 図書館改革への方向性 : オーバービュー

3. 改革実現に向けて次に取り組むべきこと

本学図書館の改革を一步一步着実に進めていくために、次に何に取り組むべきなのか。以下に懇話会で話題として出たものを列挙する。

- (1) リメディアル教育、情報教育と連携しながら図書館の今後について検討する委員会を設置する。
- (2) 利用者（学生、教員）側が、図書館サービスをどれだけ認知しているのか、図書館をどのように使っているのか、図書館に何を求めているのか、に関する意識調査を行うべきである。
- (3) 図書館における無線LAN設置、学習支援スタッフの配備などの提案のうち、コストが比較的にかからないものについては早急に整備をお願いするよう継続的に働き掛けを行う。
- (4) 図書館で現在積極的に行っているレファレンスサービスをベースに、学習者のコラボレーションを促進、支援するような機能を本学図書館に持たせなければならない。そのためには、豊富な専門知識、スキルを有するスタッフがどうしても必要となるが、そのスタッフの育成には多大な時間と労力を要すると思われる。専門職としてスタッフを雇用し、長い時間をかけて優秀なスタッフとして育て上げていくスタイルに雇用のあり方を変えていくこと。このことをより真剣に検討する必要があるだろう。

本報告書は、懇話会における議論に基づき大塚英揮委員の手によってまとめられたものである。

(2012.2)

注●公開版では、レイアウト（文字や図表の大きさ、余白、1行文字数、ページあたり行数等）のみを変更した。(2012.3)